

原爆・カトリック・平和

大 迫 章 史

原爆・カトリック・平和……。今年は二〇一五年、アジア・太平洋戦争が終戦を迎えたのが、一九四五年ですからちょうど戦後七〇年に当たります。今改めて、世界の状況をみたととき、この世界に平和は訪れたでしょうか。戦争はなくなったでしょうか。また、戦争をなくすための努力を、人類はどれほどしてきたのでしょうか。日本の現状をこれにあわせると、われわれは「平和」ということを再考しなければならぬ時期を迎えていると言えます。日本人は平和ボケをしているとよく言われますが、戦後七〇年、日本国憲法において平和の実現を誓ったわれわれは、どれほど真剣に「平和」ということを考えてきたでしょうか。この国のこの不安定な状況のなかで、自戒を含め、こうしたことをわれわれはきちんと考えなければならぬ時にきているのではないのでしょうか。

聖書にも平和に関する言葉はさまざまにあります。例えば『旧約聖書』ミカ書四章三節には、つぎのようにあります。¹⁾

主は多くの民の争いを裁き

はるか遠くまでも、強い国々を戒められる。

彼らは剣を打ち直して鋤とし

原爆・カトリック・平和

槍を打ち直して鎌とする。

国は国に向かって剣を上げず

もはや戦うことを学ばない。

人類は、歴史に学ぶことしかできません。つまり、過去に学ぶことしかできません。平和についてもそうです。戦争でいえば、われわれは過去の戦争の記憶を後世に受け継ぎ、戦争という過ちを繰り返してはならないこと、そして、平和の大切さを伝え、平和を実現していかなければなりません。戦争は人間にとって悲劇以外の何ものも生み出すことはないということを伝え続けていかななくてはなりません。

アジア・太平洋戦争において、一九四五年八月六日、広島に一つの原子爆弾が投下され、三十四万人のうち、十四万人の市民の尊い命が奪われました。また八月九日には長崎に原子爆弾が投下され、二十四万人の市民のうち、七万四千人の尊い命が奪われました。原爆投下の理由などについてはさまざまな見解があるのかもしれませんが、原爆により何十万人もの命が奪われたという事実を動かすことはできません。原爆による被害の惨状は筆舌に尽くしたいものです。まして、原爆を体験していない者が原爆を語ることの難しさがあります。それでもなお、平和を考え、実現するために、われわれは手探りで、ヒロシマ・ナガサキの記憶を継承する方法を見つけだしていかななくてはならないのだと思います。

八月六日のあの日、広島で原爆に遭い、その惨状を文字に残しておかなければならないと考え、『夏の花』という小説を記した文学者原民喜は「原爆小景」の「コレガ人間ナノデス」という非常に短い詩において、原爆の惨状をつぎのようにリアルに語っています。

コレガ人間ナノデス

原子爆弾ニ依ル変化ヲゴラン下サイ

肉体ガ恐ロシク膨脹シ

男モ女モスベテ一ツノ型ニカヘル

オオソノ真黒焦ゲノ滅茶苦茶ノ

爛レタ顔ノムクンダ唇カラ洩レテ来ル声ハ

「助ケテ下サイ」

トカ細イ静カナ言葉

コレガコレガ人間ナノデス

人間ノ顔ナノデス

また、原爆や戦争について考えるとき、峠三吉のつぎの詩も思い出します³。

ちちをかえせ ははをかえせ

としよりをかえせ

こどもをかえせ

わたしをかえせ わたしにつながる

にんげんをかえせ

原爆・カトリック・平和

にんげんの にんげんのよのあるかぎり

くずれぬへいわを

へいわをかえせ

これが戦争そして原爆が人類にもたらしたものであり、被爆者の悲痛の叫びなのです。自らも被爆者である原民喜そして峠三吉の詩はそうしたことを率直に語っています。原爆を体験した者だけが語ることでできる平和への訴えです。戦争は人類にとって悲劇以外の何も生み出すことはないのです。

アメリカ人ジャーナリストのジョン・ハーシーの著書に『ヒロシマ』というものがあります。これは、六名の被爆者（中村初代、佐々木輝文、ウィルヘルム・クラインゾルゲ、佐々木とし子、藤井正和、谷本清）を取り上げ、ハーシーがこれらの人物にインタビューを行って、原爆が何をもたらしたか、その惨状を原爆投下の翌年一九四六年にニューヨーク誌に発表したものです。六名の人物のなかの一人にカトリック神父・クラインゾルゲが取り上げられています。彼はドイツ出身であり、後に高倉誠という名前で日本に帰化しています。帰化との関係で、クラインゾルゲ神父のエピソードをお話しすれば、被爆者の証言を集めるためのインタビュー依頼のために電話をかけた際、ある記者の「クラインゾルゲ神父はおられますか」との問いかけに、クラインゾルゲ神父は「ソナナ人ハ存在シマセン。」と答え、改めて「日本名、高倉神父ですが……」との問いかけに対しては「それは私です。」と答えたと言います。⁴ こうした問答にクラインゾルゲ神父自身のアイデンティティがどこにあったかを知ることができるのではないでしょう。あくまで、彼は日本の立場から物事を考えようとしていたのでしょうか。

彼が一人の被爆者としてまたカトリックの神父として原爆をどう考え、平和の大切さを訴えているのかを少し考

えてみたいと思います。クラインゾルゲ神父は原爆投下当時、広島市の中心部・幟町にあったカトリック教会で、他の三人の神父（ラサール神父、シッファ神父、シースリック神父）とともに被爆しています。

九死に一生を得たクラインゾルゲ神父は、その後も原爆症を煩い、入院院を繰り返す生活を余儀なくされています。その神父が、あるとき、原爆の後遺症で苦しむ人たちをみて「貴方がたのおっしゃる神様が、もしそんなに親切なおやさしいお方なら、大勢の人をこんなに苦しませておくんて、変ですわ」と言った女性（これは佐々木とし子であり、この人は後にクラインゾルゲ神父によって煉獄援助修道会の修道女となった人です。）に対して、つぎのように答えています。「いまの人間というものが神様の思し召しどおりのありさまではないからです。人間は原罪のために恩寵の手から墜ちたのです」。クラインゾルゲ神父が広島への原爆の投下のみならず、戦争というものをどう受け止めたかが、この言葉には表れているでしょう。

また、被爆証言の取材において、クラインゾルゲ神父は「表だった平和運動には、性格的についてゆけない」と自ら語っているのですが、それでは彼は平和について何も考えていなかったのでしょうか。何も行動しなかったのでしょうか。私はそうではないと思っています。そうではなく、彼は表だった平和運動とはまた別の「平和」に対する人類がとるべき姿勢をわれわれに示してくれているのではないかと思えます。

みんな戦争はいやなんです。原爆はむろんいけません。しかしアメリカばかり怨んでもしかたがない。日本もドイツも、原爆ができていけば、きつと使ったでしょう。いけないのは人間同士が疑い合うこと、戦争でもうかる一部の人間がいるからです。核実験をやめないのも、このためです。私たちには世界を一度に変える力はありませんが、自分の周囲だけでも少しずつよくしていきたい。

彼は、この言葉のとおり、ハーシーの『ヒロシマ』執筆のためのインタビューの通訳兼案内人をつとめたり、アメリカ人軍医を原爆資料館に連れて行ったり、表だった行動ではありませんが、平和に対する自らのつとめと考えることを行動にうつしています。

彼が自らの被爆体験から導き出した戦争と平和とは何だったのでしょうか。原爆は個人が招いた苦難ではなく、人類が招いた苦しみであり、「病氣や貧乏は苦しいが、それは肉体の苦しみです。だから私の心は病氣のときでも、いつも平安と喜びがあります。キリストが十字架で死んだため、多くの人が救われたように、私たちが苦しむことによって、ほかの人が救われるのです。神の御心のままに罪をつぐなうだけです」。

こうした考えには、彼の戦争に対する向き合い方が表現されていると同時に、戦争が人の心に生じるものであること、だからこそ、平和のためには人々の心のあり方が最も大事なのだということを表現しているのです。

クラインゾルゲ神父の自らの被爆体験をもとにした、こうした言葉や彼の生き様は、戦後七〇年の現在に生きる今のわれわれに、改めて「平和」という問題を突きつけ、これを考えることの大切さを訴えかけているのではないでしょう。

(人間発達学科准教授)

【註】

- (1) 日本聖書協会『新共同訳 聖書』一九九六年。
- (2) 「原爆小景」原民喜『原民喜全詩集』岩波文庫、二〇一五年、四六〜四七頁。
- (3) 「序」峠三吉『新編 原爆詩集』青木書店、一九九五年、九頁。
- (4) 中国新聞社編『証言は消えない』未来社、一九九六年、一八八頁。

(5) ジョン・ハーシー（石川欣一他訳）『ヒロシマ「増補版」』法政大学出版局、二〇一四年、一〇六頁。

(6) 同右。

(7) 中国新聞社前掲書、一九一頁。

【参考文献】

柿木伸之『パット剥ギトッテシマッタ後の世界へ』インパクト出版会、二〇一五年。

中国新聞社編『証言は消えない』未来社、一九六六年。

峠三吉『新編 原爆詩集』青木書店、一九九五年。

原民喜『原民喜全詩集』岩波書店、二〇一五年。

ジョン・ハーシー『ヒロシマ「増補版」』法政大学出版局、二〇一四年。

G・バタイユ（酒井健訳）『ヒロシマの人々の物語』景文館書店、二〇一五年。

フロイト（中山元訳）『人はなぜ戦争をするのか』光文社古典新訳文庫、二〇〇八年。